

## 第4講：108 「登る道は幾筋も」

## 1. 登場人物

この逸話は明治15年（1882）頃の話であり、登場人物は今川清次郎である。今川は弘化元年（1844）生まれで、明治15年には38歳で働き盛りの頃である。仕事は大阪船場で樽の製造をしていた。屋号は「たるせ」である。入信のきっかけとなったのは長年の胃病である。今川自身は熱心な「法華経」の信者であったが、教祖に胃病を救けていただき、それを機にお道一筋となり、「人助け」に生涯尽くした人物である。

## 2. 逸話の勘所

「胃病をご守護いただく」

今川は、「家に僧侶を請じていつも祈祷していたが、人の病気を救うことはあっても、自分の胃病は少しも治らなかった」と逸話に記されている。

長年、胃病に悩む今川はなんとか自分も救っていただきたいと法華経にすがるものの、自分自身の病は治らず、はがゆい思いの日々であった。そんな中、近所の竹屋のお内儀から「結構な神様がありますのや。」と教祖のことを紹介されてお道の話聞かせていただき、三日三夜のお願いで、三十年来の胃病がすっかり治ったのである。鮮やかにご守護いただいた今川はそれ以降、法華経からお道に改宗し、名前も清次郎から「聖次郎」と改めている。

「登る道は幾筋も」

教祖より、「富士山は、頂上は一つやけれども、登る道は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」と聞かされ、いたく感激した。法華経を信心する今川がお道に改宗した動機は、悩んでいた胃病に不思議な、鮮やかなご守護をいただいたことに尽きるが「登る道筋は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」という教祖のお言葉が今川の心に響き、法華経からお道の信仰へと改宗させる内的パワーを生みだし、新たな信心の道を歩み出したのである。

加えて、明治16年には今川の9歳になる長女のヤスが花疥癬となり、その時にも教祖よりお助けいただいている。教祖の大きなお慈悲にあふれる態度に接し、言いようのない感激、感謝の気持ちが信仰を強くし、今川は生涯、教祖のお慈悲にお答えさせていただけるようにと心に定め、勤めている。

「大阪の火事」

「『大阪というところは、火事がよくいくところだすなあ。しかし、何んぼ火が燃えて来ても、ここまで来ても、ここで止まるということがあります。何んで止まるかと言うたら、風が変わりますのや。風が変わるから、火が止まりますのや。』と、御自分の指で線を引いて、お話し下された。」と記されている。

「後に、明治二十三年九月五日（陰暦七月二十一日）新町大火の時、立売堀の真明組講社事務所にも猛火が迫って来たが、井筒講元以下一同が、熱誠こめてお願い勤めをしていたところ、裏の板塀が焼け落ちるのをさかいに、突然風向が変わり、真明組事務所だけが完全に焼け残った。聖次郎は、この時、教祖からお聞かせ頂いたお言葉を、感銘深く思い出したのであった。」と記され、逸話は結ばれている。

資料によると、当日の午前2時に北東の風6.9mの風が吹い

ており、午前3時頃に菓子屋から失火し、強い北東の風によって大火となっている。その後、10時には7.8mの東風に変化して、鎮火の方向に向かっている。

教祖のお言葉通り、風向きが変わる、風が止まることによって火の勢いも衰え、鎮火したのである。

## 3. 信仰的思案

今川が信心していた「法華経」は、飛鳥時代に聖徳太子が注釈書を撰述した『法華経義疏』などで教えが説かれ、その歴史は古い。仏教は解釈の相違からさまざまな宗派へと分派しているが、その中でわが国では最も流布した教えの一つが法華経である。その教えは、「一切衆生」を篤く説き、誰もが仏性を有し、成仏できることを示した教えである。

仏教の宗派の多さを表わす言葉に「8万4千の宗派」という言葉がある。それぞれの時代の中で仏教の教えを解釈し、開祖となった先人も数多い。「富士山は、頂上は一つやけども、登る道筋は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」のお言葉は、山登りに例えて教示された教祖のお言葉である。それぞれが信心を深めて頂上に達する先には、この世界は、世界中の人間はみな「親神様の懐住まい」であり、人間は親神様のご守護によって生き、生かされていることを今川は教祖から教示されたのである。法華経を信心してきた今川にとっては、その教祖の一言、ひとことのお言葉は衝撃的な、心にしみるものであり、深く感激し、生かされている喜びに感動したことと推察する。

私自身の解釈であるが、ここ数年、新型コロナウイルスで世の中は、社会は一変している。信仰生活も大きく影響を受け、「にをいがけ」のあり方も、行事を行うことも、参拝もままならない事態が続いている。参拝のあり方を例にとっても、教会に参拝に行く、毎月26日の月次祭におぢばに帰り、神殿で参拝することもままならないのである。おぢばに帰り、神殿でかんろだいに一番近い所で参拝することもコロナウイルス禍ではでき難い状況下にある。

しかし、教会に日参する、教会本部の神殿に行って参拝する、月次祭におぢば帰りしたいと思っても、それが叶わない状況はコロナ禍だけではなく、実は以前からもあった。おぢばから遠い地域で生活しているようばく、信者にすれば、また身上の患いでベッドの上で日々を送っている人々からするなら、日参したいと思ってもなかなか叶わないことである。神殿に行き、かんろだいに一番近いところで参拝することが信仰者としてのあるべき姿だと思っていることも、実はそれがすべてではないのである。参拝のありかた、信仰のありかたは決して一つの姿だけではなく、人それぞれ置かれている環境によって大きく異なるものであり、それぞれが真摯に親神様、教祖の御心にすがって信仰し、教えにそって日々実践するならば「それもあるべき姿」の一つであると思う。

どんなところにおいても、どんな状況のなかにあっても、信仰は「登る道は幾筋も」のごとくである。親神様・教祖の教えをしつかり心に治め、信仰を追い求める姿は「百人百様」なのである。

親神様、教祖の道具衆として陽気ぐらしを日々実践する姿は、何からでも、どこからでも可能であることをこの逸話から思案する。